

[国際シンポジウム]

「孫文と東アジアの平和」

日時 2013年7月8日（月）
場所 愛知大学名古屋校舎W31, 32会議室

7月8日、愛知大学名古屋キャンパスにおいて、東亜同文書院大学記念センターと台湾・東呉大学および国父記念館との共催による国際シンポジウム「孫文と東アジアの平和」が開催され、関係者を含め約60名の聴講者が参加しました。なお、共催の台湾の各機関は、孫文に関する2つの国際シンポジウムの開催を来日の目的としており、7月6日には神戸の孫文記念館にて「孫文と日本」をテーマとした報告と討論が行われました。本学での実施は、もう一つの国際シンポジウムである「孫文と東アジアの平和」をテーマに開催されたものです。

本シンポジウムは砂山副学長および謝政論東呉大学主任秘書、林國章国父記念館副館長による挨拶から始まり、藤田佳久名誉教授、林國章国父記念館副館長の司会の下、セクション1「孫文『大アジア主義』の歴史と現代における意義」、セクション2「東北アジアの平和関係の構築」、セクション3「東アジアの政治・経済の互惠と協力」の3つのテーマについて、日本と台湾の総勢16名の研究者による報告と論評が行なわれました。

東亜同文書院大学記念センターからは、馬場毅センター長と武井義和研究員が発表に臨みました。馬場センター長の報告「孫文の大アジア主義」は孫文が1924年に神戸で行なった「大アジア主義」の演説を手掛かりに、孫文の大アジア主義思想をベトナムの独立運動家ファン・ボイ・チャウによる日本の評価と比較して、その特徴を浮き彫りにするとともに、それが日本でどのように受容され、変質していったのかについて論じ、最後にそれが将来のアジア共同体の基礎となる事を述べました。

武井研究員の報告「センター所蔵資料の紹介」では、記念センターが所蔵する資料を紹介し、とくに孫文支援者だった山田良政・純三郎兄弟の生涯について、様々な資料をパワーポイントで映し、説明しました。また、馬場センター長と武井研究員の他、7名の日台研究者による報告は、孫文の思想を対象として、あるいは孫文の思想を踏まえつつ、現在や未来の東アジアのあり方について論じました。以下ご紹介します。

許雅棠（東呉大学政治系教授）「孫文の大アジア主義からの古代中国の天下観概説」

孫文の思想について古代中国戦国時代の儒家による王道思想にルーツを求め、その背景について論じるとともに、伝統的な中国の思考の影響という点についても論じ、孫文の思想が今日の東アジア海域をめぐる国際的問題解決の手掛かりとなるのではないかという考えが示された。

黄崇修（東呉大学哲学系教授）「『礼記』から見る「大アジア主義」思惟と現代における意義」

孫文の「大アジア主義」の柱となる「王道」と「霸道」の概念は孟子が著した文章に見ることができるとし、それはその後どのように発展的に解釈がなされ、やがて孫文の思想として取り込まれていったのかについて論じられた。

柴田哲雄(愛知学院大学准教授)「東北アジアの平和構築」

東北アジアは朝鮮戦争以降には大規模な戦争は生じず、「永い平和」が維持されてきたとし、その上で「永い平和」を将来的に確固たるものにするために、台湾や中国は民主化に取り組み、日本は歴史問題について誠意をもって取り組むべきであると指摘された。

周家華(徳霖技術学院教授兼校長)「孫文の平和思想の実践—中台経済・文化論壇を中心にした分析」

孫文が発表した「大アジア主義」から90年近く経過した現在でも平和を発展させる王道文化が日台関係や中台関係、日中関係などの観点から価値があると指摘するとともに、今後どのように発展させるべきかという点について、中台兩岸の経済貿易に関する論壇から論じられた。

謝政諭(東呉大学政治系教授兼主任秘書)「東アジアの「和」文化世紀の挑戦」

17世紀以降欧米の侵略的性質を持つ「力」が東アジアに及ぶ中、日本・中国・台湾は如何に対応しようとしたのか、そして現在尖閣諸島をめぐる日本・中国・台湾の相互対立を克服し、平和共存の道としてはどのようなものがあるかという問題意識に則り論じられた。

呉秀玲(台湾大学国家発展研究所助理教授)「孫文の統一観から見た中台と東アジアの平和発展」

孫文の国家統一観と平和に対する主張を手掛かりに、日・米・南北朝鮮とロシアを事例として、東アジアの平和を決定する鍵となる国家とその作用について検討するとともに、中台兩岸の平和発展に影響を与える重要な要素についての分析の試みがなされた。

呉徳美(政治大学国家発展研究所教授兼所長)「東アジア経済再編でのRCEPとTPPの協力と競争—台湾の役割を含めて」

ASEANを土台とするRCEPとTPPを取り上げ、これらに参加する東アジア各国の協力や互恵に関し、中米二カ国の協力と競争によって受けるであろう東アジア経済の未来への影響や、中国の要因による台湾の政治経済上に受ける影響などについて論じられた。

このように、今回の国際シンポジウムは、孫文の思想を歴史的に捉えるだけでなく、将来の東アジア共同体を見据えた現在の東北アジアの緊張緩和という観点について孫文の思想と関連させ、それについての貴重な提言を活発な意見交換の中から出されたところに大きな特徴がありました。

最後に馬場毅センター長、周家華徳霖技術学院校長による閉幕の辞が述べられ、シンポジウムは終了しました。なお開催にあたって、国父記念館の劉碧蓉氏に大変お世話になりました。

